

2022年度 日本インターンシップ学会東日本支部 第3回研究会報告

報告者 松坂暢浩（東日本支部 支部長）

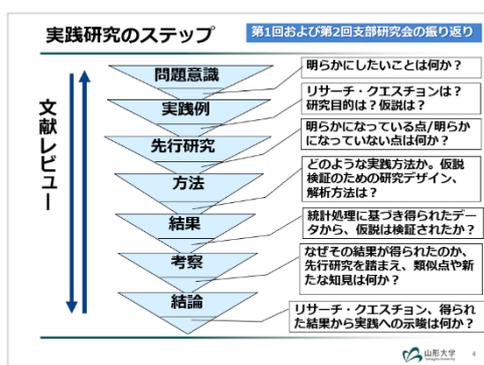
2022年度第3回研究会（2023年6月3日（土））は、台風2号の接近に伴い、当初予定していた対面とオンラインのハイブリット形式からオンライン（Zoom）形式に変更して実施いたしました。当日は、全国から20名の大学教職員、民間企業など様々な機関でインターンシップに関わる皆様に参加いただきました。

第3回の研究会では、支部長の松坂暢浩会員（山形大学教授）がコーディネーターとなり、2022年度の支部研究会のテーマ「インターンシップの実践事例を研究につなげる」を基にこれまで実施した全2回の研究会の振り返りとまとめを行いました。また、これまでの参加者からいただいた質問などに対してコメンテータの山本美奈子会員（山形大学准教授）から補足説明いただき、その後に質疑応答を行いました。

コーディネーターの松坂会員より、研究会のまとめとして以下の4点が挙げられました。1つ目は、研究にあたり、実践したプログラムの目的や目標に立ち返り考える視点をもつこと。2つ目は、効果検証の結果から逆算し、プログラムのどのような取り組みが効果につながっているかを考えること。3つ目は、効果検証にあたり、関連領域の先行研究をレビューし、適切な検証方法を検討すること。4つ目は、研究は一人で頑張り過ぎず、学会のネットワークを生かして共同研究を検討することも大切であること。以上の観点は、実践を研究につながる上で参考になる点であると考えています。

研究会後の参加者アンケートでは、12名の参加者から回答があり、研究会の満足度は「大変参考になった」と「参考になった」あわせて100%でした。また感想として、研究会に3回連続で参加することで理解や知識が深まった、説明のあった研究のステップを意識して実践し研究発表からまず始めていきたい、一人で研究するのに悩んでいたのが共同研究を考えていきたい、本研究会を通じて学会での研究発表や論文投稿につながることを期待したい、などのコメントをいただきました。

また、インターンシップの事前学習に関する実践および研究や研究方法（質的研究）の勉強会の実施などを検討いただきたいという意見もありました。次年度の研究会では、今回いただいたコメントも参考にプログラムについて検討したいと考えています。



まとめにかえて

先日行ったコーディネーターおよびコメンテーターとの振り返り内容

1. 実践したプログラムの目的・目標に立ち返る
2. 結果から逆算して考える視点
3. 適切な検証方法の理解
4. 共同研究の重要性
(一人で頑張りすぎない)

山形大学